

アルジェリアにおける長期政権の背景 Historical Background of Longtime Rule in Algeria

概要

アルジェリアでは、2014 年 4 月に行われた大統領選挙で、77 歳の現職、ブーテフリカ大統領が 4 回目の当選を果たした。「アラブの春」で中東アラブ諸国の体制が揺らぐなか、アルジェリアにおいてこのような長期政権が維持されている理由は、1988 年以降の体制構造の変容に求められる。

16 年目のブーテフリカ政権

1999 年以来現職であるアブドゥルアズィーズ・ブーテフリカの政権は、今回の当選で通算 16 年目に入ったことになる。5 年前の前回選挙に比べると、投票率は 74.56%から 51.70%に落ち、ブーテフリカの得票率も 90.23%から 81.49%に低下した(2009 年 4 月 15 日付、2014 年 4 月 23 日付アルジェリア官報を参照)ものの、2 位のアリー・ベンフリース(元首相)以下を大きく引き離しての当選であった。しかしながら、ブーテフリカ大統領については 2013 年春の長期入院以降、健康状態が心配されており、また、16 年目に突入した長期政権に対して、野党や国民からの不満の声も上がっている。

2014 年 6 月 10 日、野党と無所属政治家、人権活動家らからなる「自由と民主化移行のための調和」¹の呼びかけにより首都アルジェで開催された「民主化移行」会議では、政治的停滞に対する批判と、アルジェリアの民主化移行の必要性が強調された。デモクラッツと呼ばれる左派政党(Rassemblement pour la culture et la démocratie: RCD、Front des forces socialistes: FFS)とイスラーム政党(Mouvement de la société pour la paix: MSP、Front pour la justice et le développement: FJD、Ennahda)が一堂に会したことで注目されたこの会議をめぐる、二つの話題が新聞をにぎわせた。

一つは、軍の政治的役割である。前記会議において、ムールード・ハムルーシュ(元首相)が、民主化移行に際して軍が重要な役割を果たすべきであると発言したほか、ムクラーン・アイト・ラルビー(人権活動家)は、「体制を構築したのは軍であり、[アルジェリアが独立した]1962 年以来、大統領と政府を立てたのは軍である。現状において、軍は退くことはできないはずである。平和的な変革を行うために、軍が介入しなければならない」(El Watan 紙 2014 年 6 月 11 日付)と、アルジェリア政治の調整役としての軍の役割を強調した。90 年代の内戦期以来、政治に表立った介入は行わないとされている軍であるが、ブーテフリカ政権を批判する立場から、アルジェリアの体制の中枢を担うアクターとしての軍の役割が、再び喚起されたわけである。

もう一つは、イスラーム救済戦線(Front islamique de salut: FIS)の政界復活をめぐる論争である。前記会議には、かつてアルジェリア初の複数政党政に基づく選挙(90 年の地方選挙、91 年の国政選挙)での勝利によって体制に危機をもたらした、92 年に禁止された FIS の元活動家 3 名(アブドゥルカー

¹ al-Tansiqiyya min ajl al-ḥurrīyāt wa al-intiqāl al-dīmuqrāṭī/ Coordination nationale pour les libertés et la transition démocratique.

ディル・ブーハムハム、カーミル・ゲマーズイー、アリー・ジェッディー)が参加していた。他方、FIS の元スポークスマンで、90 年前後に若者たちに絶大な影響力のあったアリー・ベルハーッジュは、混乱を避けるために今回の会議にはあえて参加していない(Expression 紙 2014 年 6 月 11 日付)。FIS の政界復帰の噂はウーヤヒヤ大統領府長官によってすぐに否定されている。また、解散後 20 年を経た FIS の現在の社会的影響力は極めて限定されており、現在の体制にとっては何ら脅威でもないといえる。むしろ、80 年代末に始まったアルジェリア体制危機の最重要アクターであり、その後徹底的に弾圧された FIS の復活が噂されること自体が、ブーテフリカ政権が当初から取ってきたイスラーム主義者との和解路線が、今に至るまでに一定の成果をもたらしたことを示しているだろう。

ブーテフリカ政権が長期にわたって継続している理由は、1988 年の大衆暴動をきっかけとするアルジェリアの体制構造の変容と、そこにおいて、軍と区別され、軍に匹敵する新たな権力の中枢として、大統領府が重要な役割を果たすようになったことに求められる。以下においては、1988 年以降のアルジェリアにおける政軍関係の変化について検討する。さらに、ブーテフリカ政権が 1999 年の成立以降、90 年代の内戦からの正常化と「国民和解」を目指してきた事実を確認したうえで、同政権が目下直面している課題について述べたい。

政軍関係の変化

大統領府(および政府)に反対する勢力が軍の介入を叫ぶ背景には、アルジェリア政治における軍の独特の位置づけがある。アルジェリア人民軍(Armée nationale populaire: ANP)は、フランスに対する独立戦争(1954~62 年)を戦った民族解放戦線(Front de libération nationale: FLN)の軍部、民族解放軍(Armée de libération nationale: ALN)を前身としている。独立後の FLN による一党独裁体制下で、軍は長くアルジェリア国家そのものの正統性を担保する役割を負って来た。ベン・ベラ大統領の時代に採択された、独立後最初の憲法である 1963 年憲法では、「国軍は共和国の国土を防衛し、党の枠内で、国の政治的・経済的・社会的活動に参加する」(第 8 条、抜粋)と明確に定められていた。次のブーメディエン大統領時代に成立した 1976 年憲法においても、「革命の主体である人民国軍は、国の発展と社会主義の建設に参加する」(第 82 条、抜粋)という形で、軍の政治的役割に関する規定があった。この規定が大きく変わるのは 1988 年 10 月の大規模な大衆暴動事件を受け、当時のベンジャディード大統領の政治改革の一環として導入された 1989 年憲法においてである。この憲法において、軍の政治活動に関する規定は削除され、さらに 40 条において政治的結社(実質的な政党)を結成する権利の保障が明記され、1989 年 7 月 5 日の政治的結社法によって具体的な規定が示された。アルジェリアは軍と一体になった FLN による一党独裁体制を廃止し、複数政党制に移行したのである。

1989 年 3 月に、FLN 中央委員会の軍人メンバーが同委員会から辞職したのは、この改革を受け、軍と政治の分離を実現するためだったとされる。これ以降軍は、直接的な政治介入を自粛し、国家的危機の時にのみ救世主として現れる、トルコにおける軍隊のような、国家理念の番人としての役割を自任するようになる²。1992 年のクーデタは、FIS の選挙勝利によってもたらされた体制危機に対応し

² Maxime Aït Kaki, “Armée, pouvoir et processus de décision en Algérie,” *Politique étrangère* 2(2004): 438-439.

たものであり、イスラーム主義に脅かされたアルジェリア国家の救済のためのものであると正当化された。イスラーム主義武装勢力との戦闘は、後に「テロとの戦い」と呼称される新しい正統性を軍に与えることになった。このようにして、1989 年以降、軍はFLNから分離し、以前の政治参加とは異なる形で体制を支えていくことになった。

90 年代の内戦中に、アルジェリアの政治と社会はFISなどのイスラーム主義者を拒絶するか許容するかによって二分された。軍部の大部分をはじめ、野党の一部(RCD)、そして体制側諸機関が「イスラーム主義撲滅派」であったが、FLNの改革派や、一部野党(FFS、Mouvement pour la démocratie en Algérie: MDA、Parti des travailleurs: PT、Ennahda、Jazaïr musulmane contemporaine: JMC)、人権団体(Ligue algérienne pour la défense des droits de l'homme: LADDH)などは、FISなどのイスラーム主義者の政治参加を容認する形で、アルジェリアの民主化を再開するべきだと考えていた。こうした「和解派」は 1995 年 1 月、ローマのサン・エディジオ共同体のイニシアティブで会議を行い、FISの再統合と民主政治のためのローマ綱領を採択した³。しかしながら、90 年代の終わりには、内戦の早期終結のため、イスラーム主義者との戦略的和解が体制によって選び取られることになった。1999 年に軍人のゼルワールに代わって外交官出身のブーテフリカが大統領に選出されたことは、軍の政治からの後退の一つのステップであり⁴、また、大統領となったブーテフリカが取った一連の和解政策(1999 年の国民和解法、2005 年の国民和解憲章)にはっきりと表れたとおり、イスラーム主義者との段階的な和解に向けた、体制の路線転換を示す人選としての意味があった⁵。

1999 年に始まるブーテフリカ時代は、軍の政治からの後退と、大統領への権限集中という二つの事象によって特徴づけられる。自身の政治的手腕と巧みな人事によって、大統領は、軍からある程度自立的に政策決定を行う権力基盤を築くことに成功したのである⁶。軍と一体になった党による支配(内戦前)から、軍と大統領府の二本柱(内戦後)へという大きな転換を経て、アルジェリアの体制は、権力への批判が 대통령個人に集中しにくいような権力構造を作り出した。これは、複数政党制に基づく議会政治の定着と相まって、独裁的な権力者を許さず、コンセンサスを重視する政治をアルジェリアにもたらした。しかし、この新しい政治において、大統領府の権力は 대통령個人の能力と派閥に支えられている。それゆえに、大統領が別の人物に代わった場合に、大統領府がそれまでと同じ権力を保持できるかどうかは未知数である。1999 年以降、長期政権が続く理由の一つは、大統領が別の人物に代わった場合に起こりうる変動のリスクを、体制を支える多くの政治アクターが好まないことによる。

³ Aït Kaki, “Armée, pouvoir et processus de décision,” 429, 434-435.

⁴ Lahouari Addi, “L’armée, la nation et l’Etat en Algérie,” *Confluences Méditerranée* 29(1999).

⁵ ブーテフリカ選出の背景に「和解派」のコンセンサスがあったという解釈については、次のインタビューを参照。“Entretien avec Mohammed Harbi: Algérie; la réconciliation?” *Revue d’études Palestiniennes* 20(1999): 21-25.

⁶ Isabelle Werenfels, *Managing Instability in Algeria: Elites and Political Change since 1995* (New York: Routledge, 2007), 58-59.

新しいコンセンサスに向けて

アルジェリアの長期政権の背景に、体制の構造があることをこれまで見て来た。しかし、長期政権が表面上揺らいでいないということは、その水面下に動揺がないということを意味してはいない。大統領府と、大統領を支持する政府の文官たちは、軍と野党勢力、国民の不満の全てに配慮する必要に迫られている。なぜなら、ブーテフリカ期(1999 年～)のアルジェリアの政治が、複数のアクターによる均衡とコンセンサスの政治である限り、権力を持つ大統領府とはいえ、孤立することは危険だからである。現政権からはもはや何も引き出せないと野党や反対勢力が判断すれば、ハムルーシュとアイト・ラルビーがやや挑発的に行ったように、軍の介入の必要を叫ぶかもしれない。また、国民がその不満を一斉に直接行動を通じて訴えれば、政治的危機を招くかもしれない。軍や反対勢力の意向、そして国民の不満や期待に応えることができる形で、新しいコンセンサスの政治が望まれている。

このことを、16 年目のブーテフリカ政権は十分に認識している。第 4 期就任後のブーテフリカ大統領が最初に取り組んだ課題は、憲法改正であったが、その際に反対勢力や国民の意見を反映させる意向を示した。憲法改正自体は、「アラブの春」を受けてブーテフリカ大統領が前の任期中(2011 年 4 月)に行った演説で言及されていたが、それにいよいよ着手しようというのである。しかも、2014 年 5 月のウーヤヒヤ(大統領府長官)の宣言によれば、今回の憲法改正は、与野党、NGO、大学関係者など 100 以上の団体・個人への諮問に基づいて立案されるという(El Watan 紙 2014 年 5 月 16 日付)。

諮問された諸団体が提案した具体的な改正点としては、三権分立の強化、二院制の見直し、タマズィグト(バルベル語)の公用語化などが話題となっている。しかしながら、野党や民間団体だけでなく軍の合意と協力関係がなければ、そもそもコンセンサス形成は困難だろうとの指摘もなされている(Tout sur l'Algérie 紙 2014 年 7 月 9 日付)。

(2014 年 8 月 4 日脱稿、渡邊祥子)